



TITLE:

第48回日本泌尿器科学会中部総会
シンポジウム(1) 尿路性器癌の病期
診断法の進歩画像診断法から分子
生物学的手技まで 司会のことば一

AUTHOR(S):

守殿, 貞夫; 杉村, 芳樹

CITATION:

守殿, 貞夫 ...[et al]. 第48回日本泌尿器科学会中部総会シンポジウム(1) 尿路性器癌の病期
診断法の進歩画像診断法から分子生物学的手技まで 司会のことば一. 泌尿器科紀要 1999,
45(8): 551-552

ISSUE DATE:

1999-08

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/114100>

RIGHT:

第48回日本泌尿器科学会中部総会シンポジウム (I)

尿路性器癌の病期診断法の進歩
画像診断法から分子生物学的手技まで

—司会のことば—

神戸大学医学部泌尿器科学教室

守 殿 貞 夫

愛知県がんセンター泌尿器科

杉 村 芳 樹

近年、尿路性器腫瘍診断学においても、マクロからミクロそして遺伝子へと医学基礎研究法の進歩に伴い多くの新しい診断法が開発され、早期の腫瘍の detection (検出) と正確な staging (病期診断) に臨床応用されている。

従来より行われている画像診断法は staging においては最も重要な役割を持ち、腫瘍の局所浸潤度とリンパ節転移の正確な画像診断は治療方針決定に直結する。一方、最近では分子生物学的手技の進歩により腫瘍の detection において遺伝子診断が可能となっている。転移診断においても従来の画像診断を用いた macrometastasis の診断から、PCR 法を用いた micrometastasis の検出が試みられている。

本シンポジウムでは、尿路性器腫瘍の代表である膀胱癌、前立腺癌、腎癌および精巣腫瘍の各疾患について、画像診断法から分子生物学的手技まで広範囲にわたり、8人のシンポジストに最新の研究成果を発表していただいた。

前立腺癌では、根治的前立腺摘出術および神経血管束温存法の適応を決定する際に重要な腫瘍の被膜浸潤あるいは精嚢浸潤の有無、さらには前立腺内における腫瘍の局在診断に関して、有馬はサーフェスコイルを用いた MRI と MTC 法により分解能のすぐれた腫瘍画像を示した。また、沖原は最新の超音波診断法であるパワードップラー法により前立腺癌の血行動態など機能的な解析を報告した。分子生物学的な検討においては、出口が PSA を標的にした RT-PCR により血中あるいはリンパ節中の癌細胞の検出に関する最近の知見を述べた。

腎癌は尿路性器腫瘍のなかでも血行性転移の多い腫瘍であり、植村と日置は nested-PCR 法を用いた分子生物学的手技による血中の腎癌細胞の検出の試みとその臨床的有用性について報告した。

膀胱癌では、有馬が MRI による submucosal enhancement に注目したステージングの有用性を示し、寛と原は従来から行われている尿細胞診検査および病理形態学的検討に加え、p53 やテロメラーゼあるいは

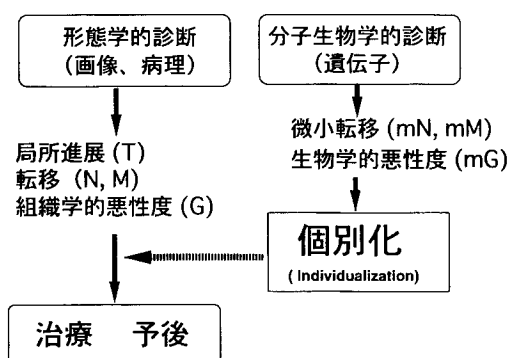


Fig. 1. Role of molecular staging on individualization of malignant tumor.

CD44 variant form を標的とした PCR を用いた分子診断を取り入れることにより、診断効率の向上と腫瘍の治療効果への関わりを報告した。

精巣腫瘍では、野々村が種々の癌関連遺伝子などの分子生物学的特性と治療効果あるいは予後との関連を示した。

癌細胞における遺伝子あるいは分子生物学的指標の研究は、近年飛躍的に進歩しており、基礎的研究から実際の臨床の場への応用が進んでいる。Fig. 1 には悪性腫瘍の病期診断における、画像および病理検査による形態学的診断と遺伝子を中心とした分子生物学的手法による診断の役割を示した。悪性腫瘍の病期診断の目的はいうまでもなく、患者それぞれの腫瘍の進展度と悪性度に関するより正確な情報のもとに、患者の予後と治療効果を予測し、それぞれの患者にとって最も適切な治療を選択することである。従来からの画像と病理による形態学的診断による TNM 分類と細胞悪性度に加え、今後は本シンポジウムで示されたような微小転移 (molecular M: mM) あるいは分子生物学的悪性度 (molecular G: mG) の補助により、より個別化 (individualize) された患者の治療と予後判定が行われると考えられる。しかし、現状ではまだこれら分子生物学的手技による病期診断の経験は浅く、すぐに臨床応用するには時期尚早と考えられ、慎重に対応する必要がある、今後のさらなる基礎および臨床研究

の発展を待ちたい。

本シンポジウムは限られた時間であったが、多くの臓器を網羅ししかも多様なテーマでシンポジストの先生方に最新の発表をいただき、活発な討論をしていた。ご協力いただいた演者と熱心に最後までご聴

講いただいたフロアの先生方にこの紙面を借りて謝意を表したい。

(Received on May 27, 1999)

(Accepted on May 30, 1999)